



Title	＜紹介＞後藤昭雄著『平安朝漢文學史論考』
Author(s)	仁木, 夏実
Citation	語文. 2012, 99, p. 36-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70895
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

後藤昭雄著『平安朝漢文学史論考』

仁 木 夏 実

本学名誉教授後藤昭雄先生の論文集として四冊目となる本書は、平安朝漢文学史に関わる問題を扱った約二十編の既発表の論考（いくつかは複数の論考が一つにまとめられている）を内容により大きく三部に分けたものである。まず、以下にその構成を示そう。なお、（ ）内に示したのは著者によるそれぞれの内容の概容である。

I（広くいくつかの時代に互るもの、あるいは、一時代の特徴と考えられる問題を論じたもの）

- 1 平安朝漢文学史の輪郭―詩序を例として
- 2 勅撰三集の唱和詩と述懐詩
- 3 勅撰三集詩人の身分と文学
- 4 承和への憧憬―文化史上の仁明朝の位置
- 5 文徳朝以前と以後
- 6 古今集時代の詩と歌
- II（いくつかの時代に及ぶものもあるが、個別の問題に限ったもの、また、一作品を対象とした論）
- 7 嵯峨天皇と惟良春道
- 8 平安朝の楽府と菅原道真の〈新楽府〉

9 『菅家文章』の成立

10 詩の注記と『菅家文章』の編纂

11 平安朝における『文選』の受容―中期を中心に

12 延久三年「勸学会記」をめぐる―文事としての勸学会

13 大江匡房「詩境記」考

III（漢詩から和歌へ）で括ることのできる諸論

14 坤元録屏風詩をめぐる

15 和歌真名序考

16 『基俊集』の贈答詩歌

17 尚歯会の系譜

18 嘉保の和歌尚歯会

19 白河尚歯会記

20 賦光源氏物語詩序

著者が「はじめに」で断っておられるように、これらの論の中には、Iで概論的に述べられたことの具体的な例がIIの中で考察される―例えば、4「承和への憧憬―文化史上の仁明朝の位置」と8「平安朝の楽府と菅原道真の〈新楽府〉」―ように、IからIIIの括りを越えて関連するものも多く含まれているが、注意すべきは、それらの論の執筆が長い期間を経ていることがままたあるということである。先ほど挙げた例で言えば、4は一九八二年、8は一九九九年に発表されている。

このことは、著者の平安朝漢文学史に対する視点や問題意識の

ブレのなさ、そして、その視点・問題意識が平安朝漢文学の歴史を考える上で根源的なものであることを端的に示している。そのため、収録されている論文の中には約三十年前、一九八〇年代に発表されたものがいくつ含まれる（もちろん、全てについて最新の研究状況を反映した補訂が行われている）が、それらはその意義を今日なお失っていないのである。

その視点・問題意識について、本書Ⅱ・Ⅲ所収の多くの論考では文体や詩集の枠組み、分類・配列の方法といった形式的な側面からのアプローチや、テキストの読み直し、諸書に残る佚文の収集等の丁寧な作業が試みられている。一見、誰にも開かれたもののようにあらながら、それらの作業に正面から取り組み、遺漏なく成し遂げることは決してたやすいことではない。長年教鞭を執られた本学文学部の新入生向けの冊子の中で、「世間で言われていることは本当にそうなのか」問うことの大切さを説かれていた著者の、これは平安朝漢文学研究における実践であり、そこから基本的かつ重要な成果が引き出される過程は、平安朝漢文学を学ぶ者だけでなく、広く文学研究を行う者にとって示唆に富むものではないかと思う。

所収論考中、本学会員にとって特に懐かしく読まれるのは「嵯峨天皇と惟良春道」であろう。二〇〇六年度の本学会総会（二〇〇六年一月十四日）において著者が行われた同題の講演を下敷きとして執筆されたものだからである。退位後の嵯峨天皇が神仙的世界に関心を持ち、隠逸的山水「青山」を描いた世界に自ら

を没入させた詩を詠じたことを指摘し、同様に隠逸に心を寄せた卑位の詩人惟良春道との身分を超えた交流について考察された講演は、その年の春にご退休を控えられた著者にとってまことにふさわしいものであると同時に、著者もまた間もなく「青山」の中に没入してしまわれるのではないかとという危惧を抱かせるものであった。しかし、その危惧は杞憂に終わり、近年の『本朝文粹』注釈の雑誌連載・刊行やNHKラジオ講座の講師といった活躍は会員諸氏もご存じの通りである。そのご活躍に新たに本書が加えられたことを喜び、味読しつづけますのご健筆を祈念したい。

（勉誠出版、二〇一二年四月、四三五頁、七、〇〇〇円）

（にき・なつみ 明石工業高等専門学校講師）